

新たな視点による中学校音楽科鑑賞領域における 音楽の教材化に関する実践的研究 (1)

岡田 知也 ・ 堀田 真央*
(音楽教育) (附属坂出中学校)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部
*762-0037 坂出市青葉町1-7 香川大学教育学部附属坂出中学校

Practical Study about Becoming It the Teaching Materials of Music in the Junior High School Music Department Viewing Domain by a New Viewpoint (1)

Tomoya Okada and Mao Horita*

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

**Sakaide Junior High School Attached to the Faculty of Education, Kagawa University, 1-7 Aoba-cho, Sakaide 762-0037*

要 旨 本研究は、平成29年告示の学習指導要領で示された「新しい時代に必要となる資質・能力」のうちの「『学びに向かう力・人間性等』の涵養」に焦点を当て、「主題による題材構成」によって授業を構築し実践を試みた。実践を手がかりとして、楽曲や作曲者への興味・関心の高まりについて、生徒の授業中の様子や振り返りから分析を行った。

キーワード 中学校音楽科 鑑賞領域 学びに向かう力 交響曲第5番

1. はじめに

鑑賞領域は、昭和52年の学習指導要領改訂以来、小・中学校音楽科の学習内容において、表現と並んで2つの領域を構成している。

平成29年3月に示された新学習指導要領においても同様に、内容は表現・鑑賞の2領域となっている。新学習指導要領において、第2学年及び第3学年の鑑賞領域の内容は次のように示されている。

“(1) 鑑賞の活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 鑑賞に関わる知識を得たり生かしたりしながら、次の(ア)から(ウ)までについて考え、音楽のよさや美しさを味わって聴くこと。
(ア) 曲や演奏に対する評価とその根拠

- (イ) 生活や社会における音楽の意味や役割
 - (ウ) 音楽表現の共通性や固有性
- イ 次の(ア)から(ウ)までについて理解すること。
- (ア) 曲想と音楽の構造との関わり
 - (イ) 音楽の特徴とその背景となる文化や歴史、他の芸術との関わり
 - (ウ) 我が国や郷土の伝統音楽及び諸外国の様々な音楽の特徴と、その特徴から生まれる音楽の多様性”

また、現行の学習指導要領で初めて示された〔共通事項〕が引き続き今回も示されている。指導計画の作成と内容の取扱いについて、まず「指導計画の作成に当たっては、次の事項に配慮するものとする」として次のように示されて

いる。

“題材など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようになること。その際、音楽的な見方・考え方を働かせ、他者と協働しながら、音楽表現を生み出したり音楽を聴いてそのよさや美しさなどを見いだしたりするなど、思考、判断し、表現する一連の過程を大切に学習の充実を図ること（後略）”

次に「内容の取扱いについては、次の事項に配慮するものとする」として、

“音楽によって喚起された自己のイメージや感情、音楽表現に対する思いや意図、音楽に対する評価などを伝え合い共感するなど、音や音楽及び言葉によるコミュニケーションを図り、音楽科の特質に応じた言語活動を適切に位置付けられるよう指導を工夫すること。”

“第1学年では言葉で説明したり、第2学年及び第3学年では批評したりする活動を取り入れ、曲や演奏に対する評価やその根拠を明らかにできるよう指導を工夫すること。”などと示されている。

ところで、平成10年12月告示の学習指導要領以降、中学校音楽科において鑑賞領域の共通教材は指定されなくなった。現在、中学校音楽科の教科書は2社から出版されており、各々の編集・執筆者が選択した鑑賞教材が取り上げられている。それらのうち、両方の教科書に鑑賞教材として取り上げられているのが、ベートーヴェン（Beethoven, Ludwig van 1770-1827）作曲による「交響曲第5番 ハ短調 作品67」（いわゆる「運命」）（以下、交響曲第5番）である。「交響曲第5番」について、それぞれの教科書においては次の通り題材名、目標、扱われる音楽の諸要素等が例示されている。なお、現行の教科書は平成20年改訂の学習指導要領に準拠したものである。

・教育出版社「中学音楽2・3上 音楽のおくりもの」（以下、おくりもの）

題材名：「交響曲第5番ハ短調 作品67」

目標：「音楽の構成の仕方や、形式を理解し

て鑑賞しよう」、「オーケストラの音色や響き、リズムの動機を聴き取ろう」

・教育芸術社「中学生の音楽2・3上」

題材名：「曲の構成に注目して曲想の変化を味わおう」

目標：「動機が繰り返されたり、変化したりする様子に注目して聴きましょう」、「オーケストラの豊かな響きを感じ取りましょう」

以上の記述や教科書の内容から、例示されている「交響曲第5番」を教材とした授業は、いわゆる「楽曲による題材構成」に基づき音楽の形式・構成やオーケストラの編成等について「知る・理解を深める」といった、新教育課程における資質・能力の三つの柱でいえば「知識及び技能」の獲得を主なねらいとしたものであることが読み取れる。また「おくりもの」においては、学習活動の手がかりとして「オーケストラの響きや全楽章に現れるリズムの動機を聴き取り、気に入った楽章について、よかったところや、それを選んだ理由を述べてみよう」と示されており、同様に「思考力・判断力・表現力等」に結びつく学習活動になり得ると考えられる。しかし、現行の教科書の「交響曲第5番」のページにおいて「学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養」に結びつく学習活動に関わる記述は見当たらない。

このような従来の音楽科鑑賞領域の授業構築について、中央教育審議会（2016）による「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について（答申）」においては、中学校音楽科における改訂の具体的な方向性について「生活や社会における音や音楽の働き、音楽文化についての関心や理解を深めていくことについて、更なる充実が求められる」とされた。

これらのことを踏まえ「生活や社会における音楽の意味や役割」を「新たな視点」として授業構築の切り口とし、現行の教科書においてはまだ取組が示されていないと考えられる、新しい時代に必要となる資質・能力の3つの柱のう

ち「学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養」に焦点を当てた授業構築を試みることにした。

具体的には、今回、鑑賞の授業を構築するに際し「生活や社会における音楽の意味や役割」を学習内容として設定するため、ある題材において主題に沿った複数の教材を学習の材料とする、いわゆる「主題による題材構成」に基づき授業構築を試みた。佐野（2005, p.32）は「実践現場において鑑賞にかかわる固定的な観念やパターン化された方法、例えば、教材の解釈や選択、学習過程でのかわり、あるいは子どもの聴き方のとらえ方などを、複数の視点から問い直してみたい」と従来の固定的な観念によるパターン化された鑑賞の活動について警鐘を鳴らし、新たな複数の視点を設定する重要性に言及している。

さらに教材楽曲の選択について佐野（同）は「みんなによく知られ親しまれている楽曲で、小・中・高ともに扱える広がりや深まりをもつ楽曲、しかしともすれば、固定的な解釈やパターンで取り扱われてしまう楽曲を選択する必要がある」と、これまでも教材として取り上げられている楽曲を、あえて違う視点で深めていくことについて述べている。

一方、稲田（2015, pp.25-26）は、教材として継続して取り上げられている「交響曲第5番」を用いて、「聴衆の存在を意識した歴史的視点による鑑賞」を行うことを示唆している。

これらの先行研究を参考として、本研究では「新たな視点」として、これまで鑑賞領域の学習では取り上げられることがなかった楽曲の背景についても学習内容として設定することを考えた。例えば「その作品をその時代に聴衆として聴いたのはどのような人々か」、「その聴衆に向けて、作曲者はどのように作品をアピールしたのか」、「それが音楽にどのような変化をもたらしたのか」といった視点である。その視点に基づき二人の作曲者による作品を鑑賞する授業を実践した。

音楽科の鑑賞領域の授業は、少しでも油断する一すなわち授業研究や実践がマンネリに陥る

と、子どもは「受け身」で「孤独」な、そして教師は「知識を教えようとする」、非アクティブ・ラーニングの授業に陥ってしまう。音楽に精通した教師が「この音楽は〇〇の様子を表している」とか「この音色は〇〇という楽器の音」などと、知識の引き出しを次々と自ら開けていくなど、現在の音楽科の授業においてはあってはならないことであると筆者らは考えている。「教科書にある楽曲を教える」のではなく「楽曲で教える」という道筋が、資質・能力を育成する音楽の授業なのである。

以上の考えに基づき、本研究における方法として、新学習指導要領の内容に対応できる「新たな視点」を中心に据えて、依然として散見される「教材を教える」授業ではなく「教材で教える」授業を構築し、実践を試み、付箋及びワークシートへの生徒の記述内容を手がかりとして授業内容を検証することとした。

2. 教材曲の選定について

先述したとおり、現行の学習指導要領において、鑑賞領域で取り上げる教材曲は、歌唱教材と異なり共通教材という形で指定されていない。新学習指導要領においても同様であり「鑑賞教材は、我が国や郷土の伝統音楽を含む我が国及び諸外国の様々な音楽のうち、指導のねらいに照らして適切なものを取り扱うこと。」と文言で示されているのみである。

本研究で取り上げる「交響曲第5番」は、平成元年3月告示の学習指導要領において、鑑賞領域の第2学年の共通教材として指定されていたこともあり、その後も教育出版、教育芸術社の2社の教科書に継続して取り上げられている。

附属坂出中学校では教育出版の「おくりもの」を使用しており、「交響曲第5番」は第2・3学年（上）で鑑賞教材として取り上げられている。

本研究授業に先立つ平成29年11月の授業において「交響曲第5番」の第1楽章を教材として学習しており、今回の研究授業では、新たな切り口による授業を展開するため、全4楽章で構成される「交響曲第5番」でまだ学習していな

い「第4楽章Allegro」を取り上げることとした。

次に、ベートーヴェンの本作品と比較するためには、ほぼ同時代の作曲家であり、ソナタ形式の先駆者として多くの交響曲を作曲しているハイドン (Haydn, Franz Joseph 1732-1809) を取り上げたいと考えた。

ハイドンは、創作意欲の盛んな20歳台後半から60歳近くまでのおよそ30年間、貴族であるエステルハージ家に仕え、王侯貴族を対象とした作品を作曲したり、また、同じくエステルハージ家に仕える楽団員のことを考えて作曲したりしている。対照的にベートーヴェンは、貴族に仕えその意に沿って作曲するといったことをせず、独立した芸術家として大成することを本人も望んでいたとされる。

これらのことを踏まえ、生徒に聴く対象を意識させるためにハイドンの作品と対比させることとしたのである。ハイドンの104曲、あるいはそれ以上に及ぶといわれる交響曲作品の中で比較対象として選んだのは、「交響曲第48番 ハ長調 “マリア・テレジア”」(以下、「マリア・テレジア」)である。皇妃マリア・テレジアがエステルハージ家を訪問した際の歓迎行事のために作曲されたものであるとされており、作品の明確な意図があることは、生徒たちにとって何らかのイメージを得ることが容易ではないかと考えたからである。

「マリア・テレジア」も「交響曲第5番」と同様に全4楽章で構成されている楽曲である。そのうち本研究授業では「第4楽章 Allegro」を取り上げることとした。これは、ベートーヴェンの作品と、調性、速度等の表面的に知覚されやすい要素に大きな違いがないにもかかわらず、オーケストラによる演奏の響きや様式、曲調には明らかな違いを知覚できる作品を選ぶことにより、生徒の思考の対象が、音楽の表面的な要素にとどまることなく、音楽の内面、ひいては背景にある存在にも気づくようにというねらいからである。

3. 実践 I (平成29年度) について

(1) 題材について

① 題材名 音楽と聴衆

～2つの交響曲のちがいは～

② 対象生徒 附属坂出中学校 第2学年

3クラス (120名)

③ 題材目標

- ・ 2曲の交響曲の共通点や相違点に関心をもち、鑑賞の学習に主体的に取り組もうとしている。(音楽への関心・意欲・態度)
- ・ 音色、強弱、旋律について知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じたことと聴衆の違いとのかかわりを感じるとともに、楽曲のよさや美しさを味わうことができる。(鑑賞の能力)

④ 題材計画 全2時間

(2) 第1時

① 目標

- ・ 2曲の交響曲について、音色、強弱、旋律などの知覚したことと、それらの働きによる感受したこととの違いから考えることができる。

② 実際の指導

第1時目においては、教材曲を鑑賞し知覚したことや感受したことをもとに2曲を比較し、これらが似ていると判断するかどうかを問い、生徒自身が2曲の教材曲の違いとは何かを考えられるようにした。

なお、2曲については、以下の演奏を教材として用いた。

「交響曲第5番」は、カルロス・クライバー指揮、ウィーンフィルハーモニー管弦楽団の演奏を、「マリア・テレジア」は、アントル・ドラティ指揮、フィルハーモニア・フンガリカの演奏を用いた。このうち、ハイドンは、いわゆるモダン楽器による演奏である。近年、しばしば耳にする機会が多くなってきたピリオド楽器による演奏は、奏法の違いによって知覚する要素が散逸してしまい、焦点が不明瞭となる可能性が考えられたため、今回は採用しなかつ

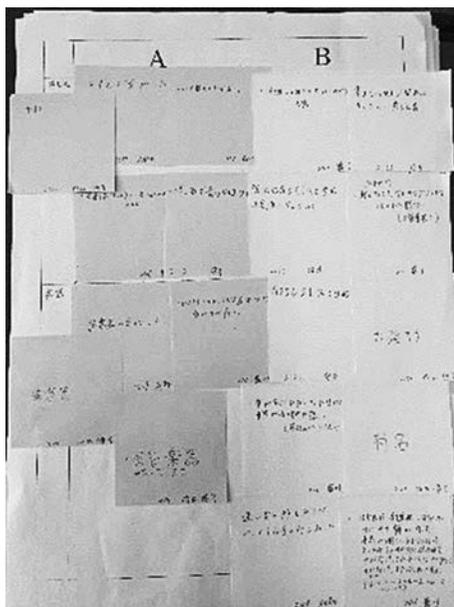
たが、今後の展開によってはピリオド楽器による演奏も視野に入れなければならないかもしれない。

生徒たちが知覚したことや感受したことを共有し、視覚的に比較しやすくなるよう、知覚したことや感受したことについて付箋に短い言葉で記入させ、班で分類をさせることとした。

(画像1及び2参照)

班で分類したものを見て、似ている所と異なる所について話し合わせた上で、ワークシートに学習課題に対する自分の意見を書かせることとした。教材曲の題名については伏せて鑑賞させたため、第1時目の終

(画像1)



(画像2)



わりには、教材曲のタイトルと作曲年、作曲家、それぞれが作曲した曲数については説明し、本時の振り返りへと結びつけた。

③ 生徒の反応

教材曲を聴いて、知覚したことや感受したことについては一人5枚ずつ付箋を与えたところ、7割の生徒が全ての付箋に何らかの気づきを記入することができていた。残りの3割の生徒は5枚全ての付箋に記入はできていなかったが、少なくとも1枚以上の付箋に何らかの気づきを記入していた。

記入した付箋を班で分類する活動においては初めての活動であったが全員が協力して付箋を分けることができていた。ただし、付箋を分類する作業に時間を費やしてしまい、似ている点、異なる点についての話し合いが十分にできず、分類したことをもとに一人ひとりがワークシートに記入するようになった。

そして、楽器についての補足(ベートーヴェンの交響曲のみで使われていた楽器があるということについて)や生徒の間違った記述について、教師からの訂正が必要ではあったが、時間が不足し十分にできなかったクラスがあった。

学習課題「2曲は似ていると言えるか？」についての意見に対して、6割程度の生徒が似ていると答えた。似ていると考えた理由としては、明るい感じであること、演奏形態としてオーケストラで演奏されていることを挙げていた。一方、似ていないと考えた生徒の理由としては、迫力がちがう、一方では使われていない楽器があることもあり感じ方が違うと判断していた。

振り返りにおいては、ハイドンがベートーヴェンに弟子入りしていたという知識を伝えていなかったにもかかわらず、ハイドンの曲にベートーヴェンがインスピレーションを受けたのではないかと、などハイドンからの影響があったのではないかとという考えをワークシートに記入した生徒が各ク

ラス10名程度いた。

以上のことから、本時における目標の達成はやや不十分であったといえよう。学習指導過程のうちグループワークの活動に関して見直しが必要であると考えられる。

(3) 第2時

① 目標

- ・ 2曲の違いについて、知覚・感受したこととそれぞれの作曲者の仕事や収入、初演の場所の違いを結びつけながら考え、それぞれの楽曲のよさや美しさについて語ることができたか。

② 指導の実際

第1時目に記述した自己の意見や振り返りを全体に共有させた上で、本時の学習課題「2曲の違いは何によって生まれたのか？」を提示した。前時において、2曲を似ていると判断した生徒が6割程度いたことから、「似ているけれども違いがあった」ということを意識させた上で、この学習課題をもとに授業を進めていった。

当時においても、聴衆の存在は作曲家にとって無視できないものであるということ意識させるために、作品が作曲された背景、どこで演奏されたのか、どのように収入を得ていたかについて表形式にし、情報として生徒に提示した(資料1参照)。前時に作品そのものの音楽の要素を知覚・感受する鑑賞活動を行っている。そこで本時の学習課題である「2曲の違いは何によって生まれたのか？」に迫るため、作品が作曲された時代背景といえる資料1を手がかりとして加えたのである。提示した情報において最も対照的な状況は、ハイドンは「貴族に仕えていた」のに対し、ベートーヴェンは「大衆に向けた作品を発表している」ことである。その情報をもとに当時誰を対象に作曲していたのか(=その作品の聴衆は誰か)を比較し、聴き手が違うことを明確にした。聴き手を意識して作曲する

(資料1)

コード () 名前 ()

資料

| 題名 | 交響曲第48番ハ長調「マリア・テレジア」 第4楽章 | 交響曲第5番ハ短調 第4楽章 |
|-----------------|---|--|
| 作曲家名 | ハイドン | ベートーヴェン |
| 作品について | ・ソナタ形式、アレグロ(速く) ・作曲年 1769年頃 ・1773年エステルハーザ家にオーストリア皇妃マリア・テレジアが訪問した時の歓迎行事の中で演奏 ・エステルハーザ家が持つ宮殿の中のホールで演奏された | ・ソナタ形式、アレグロ(速く) ・作曲年 1803年頃からの5年間 ・1808年、ベートーヴェンの作品を集めた演奏会の中で演奏された ・オーストリア・ウィーンのアン・デア・ウイーン劇場にて初めて演奏 (1801年の開館以来、多くの市民・観客を集めている。) |
| 作曲家について(仕事について) | ・富裕な名門貴族のエステルハーザ家の副楽長となり、その後、楽長となった。(指揮者や作曲者をはじめ音楽にかかわる全ての仕事をずる) | ・貴族や宮廷にも仕えず、大衆に向けた作品を発表する。 ・作曲に対する報酬と演奏会で得たお金を収入としていた。 |

資料を見て

この時期に考えたこと・気づいたことをふまえ鑑賞してみよう

本時の振り返り

時、二人の作曲家はどのような気持ちだったと思うかと発問し、作曲家の心情にせまらせた。そのことによって、より聴衆の違いというものを意識して考え、再度鑑賞した際に聴衆という視点をもとに楽曲について考えたり、感じたりすることができるのではないかと考え、最終の鑑賞につなげた。

なお、本時では「交響曲第5番」は、前述の演奏に加え、映像資料としてシャルル・デュトア指揮、NHK交響楽団の演奏を併せて用いた。「マリア・テレジア」については演奏の映像資料が得られず、同時期のハイドンの他の作品を演奏している場面の画像を提示するのみに止まった。

③ 生徒の反応

作曲された背景などの情報及び本時の鑑賞の活動を手がかりとして、ほとんどの生徒が、貴族を聴衆として演奏したのと一般の市民を聴衆として演奏したという違いを導き出し、聴衆の違いが作品の違いにかか

わっているということに着目することができていた。このことは、生徒の発言から伺うことができた。

作曲家の心情を想像させた時には、ハイドンについては「きちんとした曲を作らない」「少し静かめに優雅にしよう」、ベートーヴェンについては「どうしたら皆に好かれる曲になるかな。アピールできる曲になるかな」「親しみやすい音楽をたくさんの人にきいてほしい」など聴衆の違いをもとに想像した心情の違いが明確に表出されていたと考える。

それをふまえ再度鑑賞してみると、2曲の雰囲気の違いについて記述した生徒が9割程度おり、そのことを手がかりとして1時目に知覚したことと感受したことや聴衆と結びつけて記述していた。

以下は男子生徒の第2時目の再度鑑賞した際の記述である。

“上の資料を見てから音楽をきいてみると、ハイドンの曲は、貴族の人を敬い捧げますよみたいな感じにきこえてきます。またくり返しを使うことによって、その思いが届くように強調されているように思います。でも自分らしさというところがあまりなく個性があんまりない。宮殿に流れてそうな華やかな曲。(ベートーヴェンの曲は)ハイドンに比べ楽器の量が増えており、規模が大きいのので1つ1つの音や旋律が強く自分らしさが出ているような感じがする。繰り返しがあまりなく1つ1つの音を大切にしているようなかんじ。この曲には、自分のこれまでの人生が表現されているかんじ。苦しくて大変なことがあったけどそれを乗り越えてこの曲があるみたいな。市民にそのようなことを訴えている。”

ベートーヴェンの人生については多く説明していなかったものの、苦悩から勝利へという交響曲第5番がもつ楽曲の性格を今回の聴衆という視点をもとに男子生徒が導き出し感想に記述している。

本時のまとめにおいて本時及び2時間の授業の振り返りをワークシートに記述させた。以下は女子生徒の振り返りの記述である。

“曲の違いは作曲する人だけでなく、誰に聴かせるかによっても変わるのだと分かりました。普段よく聴く歌などはどれもテレビを見る人とか若い世代に向けての曲だったのであまり考えたことはなかったけど、今回の授業で音楽は聴かせる人も関わってくるのだと気づかされました。今日学んだことは音楽以外の場面でも必要なことなんじゃないのかなと思います。これからも、ハイドンやベートーヴェンの曲を授業だけでなく色々な曲を聴きたいです。また、ベートーヴェンは貴族や宮廷にも使えず大衆に向けて発表していて聴く人を選ばないところがかっこいいと思ったし、だからこその曲を沢山作れるのだろうと感じました。私もベートーヴェンが生きている時代で聴きたかったです。”

多くの生徒が、聴衆を意識すると違いがはっきり感じるようになったことや、聴衆を意識して作曲されていることに対して考えを深めたことについて振り返りを述べていた。上記のように、生徒自身が聴く音楽について考える生徒や作曲者(ベートーヴェン)に対する見方が変わったという生徒もいた。

(4) 実践の成果と課題

成果としては、生徒自らの音楽の見方・考え方で曲を判断した上で、「新しい視点」として「聴衆」を手がかりとして鑑賞したことにより、楽曲や作曲者に対する興味・関心は高まっていたことである。また、それまでに抱いていた作曲家のイメージについても考え直すきっかけとなったり、普段の生活の中で聴く音楽についても「聴衆」という視点で捉え直すきっかけとなったりしている。

課題としては、グループでの活動の中で知覚したこと、感受したことの共有や情報を読み取ることに時間がかかり、全体で共有する時間や

音楽を確認するという時間が少ないということである。1時目における各班の気づきを共有し、音楽の要素の中で何がどのように違うのか明確にしておく、再度鑑賞した際の記述が聴衆という視点と要素とが結びついて語ることができたと考えられる。

4. 実践Ⅱ（平成30年度）について

実践Ⅱでは、実践Ⅰでの成果をふまえ、交響曲第5番の学習の中に聴衆の視点を組み込んだ授業を取り入れた題材構成を行った。聴衆や楽曲の特徴をふまえながら、楽曲のよさや美しさとは何か考えていく鑑賞の授業を行うことを目的としている。

(1) 題材について

① 題材名

交響曲第5番 作品67第1楽章を味わう

② 対象生徒 附属坂出中学校 第2学年 3クラス（119名）

③ 題材目標

- ・ 新たな視点をもって鑑賞することのよさや面白さに気づくことができる。（音楽への関心・意欲・態度）
- ・ 繰り返される動機（音楽を構成する単位として、最も小さなまとまり）が生み出す雰囲気や、ベートーヴェンが意識した聴衆をふまえ、楽曲のよさや美しさを味わうことができる。（鑑賞の能力）

④ 題材計画

全4時間

（音楽と聴衆に関する時間は第1時目）

(2) 授業実践について

音楽と聴衆に関わる実践について、以下に述べていくこととする。

① 目標

- ・ 交響曲作品の比較から、聴衆の違いにより楽曲の特徴や雰囲気の違いを味わうことができる。
- ・ ベートーヴェンが音楽家としてどのように生きたのか知る。

② 指導の実際

ベートーヴェンとハイドンの関係やその生き方について説明した後に、学習課題を「貴族に親しまれた音楽と一般市民に親しまれた音楽に違いはあるか?」とし、楽曲の比較鑑賞を行った。

今回は時間の関係上、付箋での作業は行わず、個人でワークシートに記入した後、グループでの共有という形をとった。

③ 生徒の反応

生徒は、ベートーヴェンの方が曲の変化が多くあり、壮大であるなど派手なイメージであると感じた。感受したことをふまえ、作曲者がこのように作曲した理由を考えさせたところ、ワークシートの記述に、以下のような考えを見ることができた。

- ・ 一般市民にはいろんな人がいるから、どんな人にも親しめるようにした
- ・ 大きな変化をつけることで、聴いていてわくわく感がある
- ・ 聴いている人を飽きさせない

感受したことをふまえ、知覚した強弱の差の大きさや目立つ楽器の種類から、その意味を見いだしてできているようだった。

(3) 成果と課題

授業中の生徒の反応から、聴衆を意識させることにより、生徒が、楽曲を聴いた人にどのような感じを与えるのかを考えることとなり、楽曲の特徴の意味を考えるきっかけとなった。

題材が全て終わった後に行った、授業後アンケート（資料2参照）の、「7. 授業中に今までの見方や考え方が変わった-（2）ベートーヴェンについて」という項目に関して、回答は以下の通りであった。（調査対象2年1組 40名）

「(はい) 4-3-2-1 (いいえ)」の4段階での回答させたところ、4、または3と肯定的に答えた生徒（34名）のうち18名がこの1時

(資料2)

ベートーヴェン交響曲第5番 授業後アンケート

コード () 名前 ()

成績には関係ありませんので素直に答えて下さい。数字の所には丸をつけ、記述をしましょう。

1 交響曲第5番の授業では楽しかったか。 (はい) 4-3-2-1 (いいえ)

理由

2 交響曲第5番の曲によさ(美しさや面白さなど)を感じましたか。(はい) 4-3-2-1 (いいえ)

理由 (4か3に○をつけた人はどういうところによさを感じたについても書いて下さい)

3 楽曲をもう一度聴きたい、映像を見たいと思いましたが。(はい) 4-3-2-1 (いいえ)

理由 (どんな場面などで)

4 授業では積極的に対話することができた。(はい) 4-3-2-1 (いいえ)

5 意見や考えについて根拠をもって対話できた。(はい) 4-3-2-1 (いいえ)

6 他者の意見や考えに質問することができた。(はい) 4-3-2-1 (いいえ)

7 授業中に今までの見方や考え方が変わった。

(1) 交響曲第5番について (はい) 4-3-2-1 (いいえ)

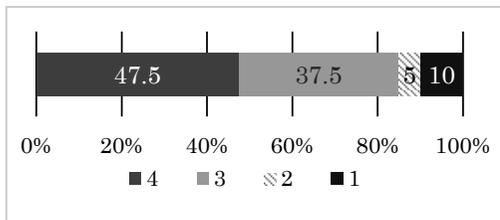
具体的に教えて下さい。

(2) ベートーヴェンについて (はい) 4-3-2-1 (いいえ)

(3) 休符について (はい) 4-3-2-1 (いいえ)

8 鑑賞の授業のよさやおもしろさは何だと思えますか。

答え忘れがないか確認をしておきましょう。



目の内容（聴衆に関すること）をもとに変容したと答えている。残りの16名は、耳が不自由なのに、楽曲の中でいろいろな変化をつけていることから、偉大な作曲家であると感じたと答えている。

また、題材を終えて記述させた、振り返りの中には以下のような記述が見られた。

“運命をならっている中は、ベートーヴェンはなんて悲しい人なんだと思った。音楽の才能を持っているのに耳が聞こえないんだと思っ

た。けれど、その中で必死に音楽を続けて一般市民の人に音楽を届けようとしている姿を見て、なんてすごい人なんだろうと思った。”（一部抜粋）

“ぼくは、この「運命」という曲の授業をして、ベートーヴェンの見方が変わりました。もとは、ベートーヴェンは壮大な貴族向きの曲ばかりだと思っていたけれど、本当は一般市民向けの、上がり下がりや動機を駆使して、うまく聴いている人をひきこみ、あきさせずとてもいい曲ばかり作っているすごい人なんだとしました。（以下省略）”

上記の2名は音楽を得意としない男子の記述である。ベートーヴェンに対して新たな気づきを得たり、また、ベートーヴェンに対して現在どのように感じているのかを表出したりしている。

教材曲は、小学校の音楽の教科書にも取り上げられていたり、テレビなどの効果音として使われていたりしており、身近なものであった。そのため、題材構成をする上で、ほとんどの生徒が新たな気づきを得る必要があると考えた。

生徒が作曲者についてどのように知っているのかをふまえ、聴衆という視点を組み込み、授業を進めていくことは有効であった。

5. 今後の課題

本研究における今回の実践では、音楽に対して苦手意識をもつ生徒にも、興味をもって学ぶことができた授業であったと考えている。また、この主題に基づいて楽曲を聴くことは、生徒自身が、楽曲がもつ音楽の特徴について、自ら意味を見いだすことにもつながっていくと感じられた。

ただ、授業の学習指導過程における「対話的」な活動の時間を十分保証できない場面が生じた。この場面は「学びに向かう力」の涵養という視点において非常に重要であることはいくまでもないことである。学習指導過程の見直しが急務であると考えている。

学習指導要領が改訂されても、教科書において取り上げられている楽曲には、同じものが相当数ある。例えば、ヴィヴァルディ (Vivaldi, Antonio Lucio 1678-1741) の「四季」、バッハ (Bach, Johann Sebastian 1685-1750) の「小フーガ ト短調」、シューベルト (Schubert, Franz Peter 1797-1828) の「魔王」、ヴェルディ (Verdi, Giuseppe 1813-1901) の「アイダ」などが挙げられる。

過去から現在まで教科書で取り上げられているこのような楽曲を題材として、新しい視点による教材化を継続して図っていきたい。

なお、本研究は平成29年度学部・附属学校園共同研究プロジェクト(研究代表者：岡田知也)として実施されたものである。

[引用・参考文献]

- ・文部科学省 (2017) 『中学校学習指導要領』
- ・中央教育審議会 (2016) 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について (答申)』
- ・新見徳英他 (2016) 『中学音楽 2・3 上 音楽のおくりもの』 教育出版, pp.30-32
- ・小原光一他 (2016) 『中学生の音楽 2・3 上』 教育芸術社, pp.34-37
- ・野本由紀夫 (2015) 「鑑賞授業をクリエイトするために—交響詩《ブルタバ》の誤解を解く」 『音楽教育実践ジャーナル』 vol.12 no.2, 日本音楽教育学会, pp.20-31
- ・加藤穂高 (2015) 「《ブルタバ》の鑑賞を通して何を伝えるか、何を学ばせるか」 同上, pp.32-41
- ・稲田隆之 (2015) 「学校教育における鑑賞教材としてのクラシック音楽の意味—クラシック音楽の「第5の聴衆」としての日本人—」 『研究報告第I部』 第143号, 香川大学教育学部, pp.19-34
- ・渡辺裕 (2012) 『聴衆の誕生 ポスト・モダン時代の音楽文化』 中央公論新社
- ・岡田暁生 (2009) 『音楽の聴き方—聴く型と趣味を語る言葉』 中公新書
- ・岡田暁生 (2005) 『西洋音楽史—「クラシック」の黄昏』 中公新書
- ・佐野靖他 (2005) 「鑑賞のもつ意味、可能性、課題

を探る—《四季》(ヴィヴァルディ作曲)への多様なアプローチを通して』 『音楽教育実践ジャーナル』 vol 2 no.2, 日本音楽教育学会, p.32-50